



第一次世界大戦前後のイタリアにおける国民意識創出に関する一考察：ヴァンバの「イタリア性」および「バリッラ」観をめぐって

著者	上野 隆生
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	11
ページ	7-22
発行年	2018-03-13
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004505/

第一次世界大戦前後のイタリアにおける 国民意識創出に関する一考察 ヴァンバの「イタリア性」および「バリッラ」観をめぐって

上野隆生 UENO Takao

——はじめに

1 —— 第一次世界大戦前後のイタリア

2 —— ヴァンバとGDD購読者同盟

3 —— ヴァンバのイタリア性

4 —— ヴァンバのバリッラ観

—— おわりに

【Abstract】 “Balilla” reminds us of the Opera Nazionale Balilla (ONB) of the Fascist regime. ONB was typically the totalitarian Fascist’s way of educating the youth.

This article focuses on the images of the ur-Balilla and the “Italianità” (being Italian) in Italy during and after WWI. Those two concepts have much to do with the process and the background of building up the Italian national consciousness. The analysis of the relationship between these two concepts and the Italian national consciousness is worthwhile in unraveling the structure and the formation of the Italian national consciousness.

Probing into the columns of Luigi Bertelli (or Vamba, his nom du plume) in *Il giornalino della domenica*, some aspects could be clarified. Firstly, Balilla is integral to the “Italianità”, and secondly, both of Balilla and the “Italianità” symbolize Risorgimento as well as Irredentismo. Those Vamba’s images appears to correspond to those of the Fascist regime. But in depth his images were different from those of the Fascist regime.

Vamba takes it very seriously that children should be treated as independent human being. Therefore, citizenship education is quite essential for children and children have the right to commit themselves in politics. Underscoring the importance of Risorgimento and Irredentismo, Vamba seeks to build up the Italian national consciousness, which at that time was still precarious. But Vamba did not participate in the Italian Nationalist Association. The probabilities are that his way of thinking could not correspond to such associations as Opera Nazionale Balilla of Fascist regime.

——はじめに

「信じよ／服従せよ／戦え」——これは、「バリッラの家」(Casa del Balilla) に大きく掲げられた標語である。「バリッラの家」は、イタリア・ファシスト政権期にバリッラ少年団 (Opera Nazionale Balilla) ¹⁾ の活動拠点として各地に設立された。たとえばガエタノ・ミヌッチ (Gaetano Minnucci) によって設計され、ローマ郊外モンテスカーロ (Montescarlo) に建てられ

た「バリッラの家」には、プールを前景にして正面建物の壁面に大きくこの標語が掲げられていた²⁾。

「バリッラ」(Balilla) は、ジェノヴァの少年ジョヴァンニ・バッティスタ・ペラッソ (Giovanni Battista Perasso) のあだ名である。バリッラは、1746 年、オーストリア継承戦争の最中にジェノヴァを占拠したオーストリア軍に対して最初の投石をして反抗の口火を切ったとされる³⁾。バリッラについては戯曲化も含め⁴⁾、反復して語られている⁵⁾。1923 年、ファシスト大評議会はその名を冠したバリッラ団を組織、8 歳から 13 歳の子どもたちはそのメンバーになれると表明した。さらに 1926 年にバリッラ少年団を創設する法律を作成、ファシスト党副秘書官レナート・リッチ (Renato Ricci) をその総裁に指名した⁶⁾。

ファシスト政権と連動していることから 1930 年代のアメリカでは、非米活動調査委員会もバリッラ少年団については注視していた。在米のイタリア反ファシスト委員会委員長と接触した非米活動調査委員会委員は、イタリア人を両親に持つアメリカ生まれの 10～15 歳の子どもたちをイタリア政府の費用でイタリアに招き、各地を歴訪させるとともに各地の「ファシストの青年組織である」バリッラ少年団とともに過ごすことで、アメリカ帰国時には熱烈なファシストとなっている、と指摘している⁷⁾。

一方、1930 年代から 1940 年代の日本においては、「愛国」と「統合」の二点からバリッラ少年団は評価され、それへの関心も高かった。文部省や外務省も調査報告をまとめる一方⁸⁾、多数刊行されたイタリアに関する紹介本でもバリッラ少年団については多く言及されている⁹⁾。さらに、バリッラ少年団についての新聞報道も少なくない¹⁰⁾。

本稿の関心は、かかるバリッラ少年団自体についてではなく¹¹⁾、その前史に当たる部分にある。すなわち、「バリッラ」とは如何なる意味を有し、それがイタリアにおいてどのように国民意識の形成に関わったのか、という点にある。

本稿では、そのような問題意識を踏まえて、『子ども向け日曜新聞』(*Il giornalino della domenica*、以下 GDD と略記する) 創刊者のルイージ・ベルテッリ (Luigi Bertelli, 1858–1920 年、以下本稿ではペンネームのヴァンバと表記する) の論考を材料として¹²⁾、第一次世界大戦前後のイタリアにおける国民意識創出がどのように行われたのかを検討する。後述するフィウーメ (リエカ、以下本稿ではフィウーメと表記する) をめぐるイタリアの対外政策の観点からは、1922 年ではなく 1915 年の時点からすでにファシスト時代が開幕していた、との指摘も早くからなされている¹³⁾。第一次世界大戦前後という時期は、ヴァンバの最晩年に当たる。また、ファシズムとの関わりを念頭におくと重要な時期でもある。

これまでに筆者は、教科書を素材としてドイツ・イタリアの日本イメージを探ってきた¹⁴⁾。軍国主義・ナチズム・ファシズムの全体主義国家の三国において、そのような相互イメージの展開とともに、幼少期の国民に対して、それぞれどのような回路で国民意識ひいては全体主義意識が涵養されていったのか、を検討するのが長期的な課題である。前稿¹⁵⁾ ならびに本稿の検討は、そのための一環でもある。本稿ではヴァンバの二著『「バリッラと呼ばれるイタリアの子どもたち」：国民的リソルジメントにおけるイタリアの子どもたち』¹⁶⁾ とヴ

ヴァンバの死後にその著作を集めて編まれた『イタリア！イタリア！子どもたちへの本』¹⁷⁾を主に用い、可能な限り GDD の論考を加えて検討を進めることとする。

1 —— 第一次世界大戦前後のイタリア

1901 年から 1922 年までの時期をダガンは「ジョリッティ時代とファシズムの勃興」としている¹⁸⁾。本節では、その時期区分に倣ってこの時期を概観しておきたい¹⁹⁾。1901 年から 1914 年までのいわゆるジョリッティ時代の最中の 1906 年にヴァンバは GDD を創刊した。一旦 1911 年夏に休刊した後、1918 年 12 月に再刊、その二年後にヴァンバは死去したが、その後も GDD は刊行され続けた。以下、1901 年から 1922 年までの時期を第 1 期 (1901 年～1907 年)、第 2 期 (1907 年～1915 年)、第 3 期 (1915 年～1922 年) の三期に分けて概観を進めていく。

第 1 期は、さまざまな要素が複合し、ジョリッティ政権は比較的うまく運営できた時期であった。世界経済の需要増大を背景として、機械・繊維工業を中心に躍進し、国民一人当たりの GDP は、ジョリッティ時代を通じて年率 2.1% の上昇を見せた。だが、北部の都市部がその恩恵を受ける一方、南部の農村は貧困状態を脱しないままであった。「無気力で従属的 [サバルタン] な大衆が存在」したと評されるのもこの時期の一面を捉えている²⁰⁾。ジョリッティは、トラスフォルミズモ (trasformismo)²¹⁾ を体現し、「すぐ目の前の、さまざまな問題を抱えた現実だけ」がその関心であったといわれる²²⁾。同時にジョリッティは、自由主義の方法を労働者階級との関係に広げて社会主義者や労働組合員に自由な活動を認めることで、国家と社会は利益を得ることができると考え、労働争議で中立的立場をとることを心がけた²³⁾。そのため、社会党主流派はジョリッティを支持するとともに、労働組合数とその加入者数は大いに増加した。要するに、ジョリッティは進歩派自由主義者と社会主義改良派との合意に基づいて、一定程度国内政治の均衡をつくり出していた²⁴⁾。

このような均衡が崩れていくのが第 2 期である。発端は 1907 年の世界的な経済不況であった。次第にジョリッティが社会主義者に近づく一方、資本家はそれに反発してナショナリスト側に傾倒していった。微妙なバランスの上に成り立っていたジョリッティ政権＝自由主義的政府は、そのバランスを崩していった。これに先立って、1903 年にエンリコ・コッラディーニ (Enrico Corradini, 1865–1931 年) によって創刊された『レーニョ』や同年にクロウチェが創刊した『レオナルド』などを嚆矢として、フィレンツェを中心に雑誌の刊行が相次いだ。それらの思潮はさまざまではあるが、反体制的であったという点では共通していた。1907 年以降は、一層その傾向が強まった。たとえば、1909 年に「未来派宣言」を発表したマリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876–1944 年) は、戦争は「世界の健康法」という同派の主張を強調した²⁵⁾。また、1910 年に『ラ・ヴォーチェ』(1908 年創刊) には、「人生と倫理を至上のものと考える我々は、あのように下劣な物質主義者を軽蔑せざるをえない」とジョリッティを批判する寄稿が掲載された²⁶⁾。同じく 1910 年には、

フィレンツェで大規模なナショナリストの全国大会が開催され、「イタリア・ナショナリスト協会」が設立された²⁷⁾。初日の基調講演を行ったコッラディーニは、社会主義がイタリア労働階級に与えた影響に言及しながら、ナショナリズムも同様のことをイタリア国家になすべきであると述べ、イタリアに国際競争の価値を教えるべきであると説いた。さらにそのような競争がたとえ戦争になったとしても、ナショナリズムはイタリアに勝利の意思を惹起すべきであると強調した²⁸⁾。なお、ヴァンバ自身がこの大会に参加した形跡は見受けられず²⁹⁾、一線を画していたと思われる。

1911年3月、三度び政権に復帰したジョリッティは、イタリア統一50周年記念祭に邁進した。すなわち、サヴォイア家の功績を称賛し、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世の記念堂建設の開始、各地で展覧会や博覧会の開催が相次いだ。そして、同年9月、対トルコ宣戦布告とリビア戦争を始め、11月、リビアは「イタリア王国の完全な主権下」に置かれると宣言した。しかしながら、リビア戦争はジョリッティの思惑通りにはいかなかった。犠牲の大きさと政府の不手際が目立ち、左右両勢力³⁰⁾から批判を浴びる恰好となったからである。結果的には自由主義的中道勢力が権威を失墜した形となり、自由主義政体の存在意義に対する疑念が増大していった。

1914年の第一次世界大戦勃発に際しては、参戦論と中立論が交錯した。すでにサランドラに政権は譲っていたが、ジョリッティは、「イタリアは、中立を維持することによって、戦勝国との交渉において『相当の取り分』を獲得することができる」とし、イタリア社会党は最後まで中立を主張した³¹⁾。だが、左右両勢力は参戦論を展開した。尤も同じ参戦論でも幅があった。マリネッティらの未来派は「戦争は世界を救う唯一の治療薬である」とし、ナショナリストらは、参戦は「汚職にまみれた議員たちを駆逐し、売春宿のごとき議會を炎と鉄で浄化することによって」「国家」を刷新する手段であるとしていずれも歓迎した。左派勢力は、戦争体験によって大衆は政治的に目覚め、旧来のエリート権力を打破できるだろうとし、サンディカリスト³²⁾らは参戦によって革命の条件が整うことを期待していた。総じて、最も強硬に参戦論を主張したのがいわゆる知識人グループで、戦争はイタリア全土を一つの共同体にまとめあげ、かつてのリソルジメント運動の夢を完成させる絶好のチャンスである、としたのである³³⁾。

1915年4月、イタリアはイギリスといわゆるロンドン密約を交わした。この密約は、参戦と引き換えにトレンティーノ、ヴェネツィア・ジューリア、南チロル、フィウーメを除くイストリア、ダルマチアの一部までを含んだイタリアの未回復地併合要求をイギリスが受け入れるというものであった。翌5月、三国同盟廃棄を宣言したイタリアは、協商国側に立って参戦することを決めた。その間、未来派・ナショナリストらの参戦論者らは街頭に繰り出して各地で集会を開き、「戦争は『国家』の命令である」と叫んで激しい参戦運動を展開した（いわゆる「光り輝く五月の日々」）³⁴⁾。

第3期は、第一次世界大戦参戦とその勝利の結果に関わる時期である。参戦に関して、大多数の国民は口を閉ざしたままで諦めの沈黙を保った。徴兵されてアルプス高地の塹壕

で戦死した兵士の大多数は南部出身の農民であった。軍隊生活は過酷を極め、士気も低下した。これが1917年10月のカポレットの大敗を招くこととなった³⁵⁾。

1918年11月、オーストリア・ドイツと相次いでイタリアは休戦協定を調印、第一次世界大戦に勝利した。だが、パリ講和会議では、悲願ともいえるフィウーメ・ダルマチアの領有が認められなかった。そのため、「損なわれた勝利」という表現が人口に膾炙した。戦時中は軍需工業を中心に工業生産が拡大したが、1918年以後は経済危機に見舞われたことから、失業者ならびにストライキ参加者が激増、さらにはインフレが急速に進行したことから、各地でストライキや暴動が起きた（いわゆる「赤い二年間」）。1919年1月には突撃隊の全国組織が結成され、3月にはムッソリーニが「戦士のファッシ」を結成した。「損なわれた勝利」はフィウーメという具体的な対象を伴うことで、ロマンティズムと愛国心、排外的世論などとも相俟って、一気に国家主義的な方向に移行する下地を形成したといえよう。ガブリエーレ・ダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio, 1863-1938年）が義勇兵を率いてフィウーメを占領したのは1919年9月で、その後1年余りに亘ってフィウーメを占領した。1920年6月から5度目の政権を担ったジョリッティは、1920年11月にユーゴスラヴィアとラパッコ条約を締結、フィウーメを独立自由市とすることで決着した。そして、12月にイタリア軍を派遣してフィウーメを攻撃（いわゆる「血のクリスマス」）、翌1921年1月にダンヌンツィオはフィウーメを離脱した。ヴァンバは、1880年代にローマで刊行されていた雑誌『打ちこわし隊長』（*Capitan Fracassa*）に加わって以来、ダンヌンツィオとは親交を深めていた³⁶⁾。ダンヌンツィオは自らの写真に「私のよき忠実な友ヴァンバへ」と署名して送っている³⁷⁾。後述するように、フィウーメへのヴァンバの関心はダンヌンツィオの行動により一層高まったことは容易に推測できる。

だが、ヴァンバはフィウーメの顛末を知ることなく死去した。そして1920年末からファシスト運動が急速に盛り上がりを見せた。1921年11月にはローマでファシスト大会が開催され、国民ファシスト党（PNF）が結成された。「フィウーメか死か」、「フィウーメ万歳、イタリア万歳」と叫んでいたのはとりわけ若い世代であった³⁸⁾。各地の突撃隊には学生とともに、戦争から戻った復員兵も多く加わっていた。1922年に入ると、突撃隊による社会党や労働組合を対象とした破壊活動と暴力が相次いだ。同年10月ファシスト党大会がナポリで開催されると、「ローマ進軍」を宣言して「進軍」を開始、二日後にはローマ周辺に2万5000人余りのファシスト部隊が集結した。ムッソリーニは国王に面会して大連立内閣を提案、11月には下院がムッソリーニ政権に全権委任を承認すると、12月にはファシズム大評議会が開催された。

自由主義政体は、民主主義的側面を強めることなく、プチ・ブルジョワジーと「平穏な情性に戻ることができない在郷軍人」の支持を得た³⁹⁾。ファシズムという権威主義的反動の推進に変化していったのである。

2——ヴァンバとGDD購読者同盟

1906年にGDDを創刊したヴァンバは、その二年後の1908年に新たな企画を具体化した。子どもたちのための政治生活の集会を創設したのである。それが『『子ども向け日曜新聞』購読者同盟』(Confederazione giornalinesca、以下、「同盟」と略記する)であった⁴⁰⁾。「6月18日午前10時に母親協会(Istituto Materno)のホールで会おう」という招待状の付されたチラシを、二週間前に購読者の子どもたちは受け取っていた。当日、ヴァンバが登壇する前から会場には「500人の子どもたちが騒然としていて、足を踏み鳴らし」、「ヴァンバを出せ!」と叫んでいた。開会宣言を行うためにヴァンバが登壇すると、「窓ガラスを震わせる万来の拍手で迎えられた。」こうGDDは報じている⁴¹⁾。

ヴァンバは、「6か月から60歳までの男女の小僧っこたち!」と呼びかけた⁴²⁾。GDDの定期購読者の子どもたちだけでなく、その親をも意識していたことがわかる。ヴァンバは、GDDの編集において、子どもたち読者を人間として扱い、子どもたちの水準に身をおきながら、ヴァンバ自身の水準に子どもたちを引き上げようと試みた⁴³⁾。同時に、諧謔とユーモアを絶やさず、自ら子どもの心を失わなかったヴァンバの特徴がよく出ている一言であろう。重要なのは、GDDの定期購読者たちはトリエステ、イストリア、ゴリツィア、ダルマチア、トレントを含むイタリア全土に拡大している、とした点である。そしてこの瞬間、『『回復されざるイタリア万歳!』との耳を劈く満場の叫び』が会場にこだました⁴⁴⁾。

ヴァンバ自身が早くからイッレデンティズモ(irredentismo)⁴⁵⁾に傾倒していたことがわかるとともに⁴⁶⁾、ジャン・ブラスカ⁴⁷⁾に見られるように子どもの政治意識とその涵養とを重視していたことが窺われる。実際、「同盟」は擬似的に国家組織を模して形成されていた。その後、ジロトンド(Girotondo)⁴⁸⁾とも呼ばれた「同盟」については、GDDに特設ページ(「赤い頁」(Pagine Rossa)、実際に赤い用紙を使用)を設けてその動向を報じている。さらに、「人民にGDDを無償で普及するための永遠のイタリア精神協会」(Associazione indissolubile di anime italiane per la diffusione gratuita del Giornalino della Domenica nelle classi popolari、略称A.I.D.A.I.)も立ち上げた⁴⁹⁾。

このような運動にも関わったヴァンバが、国民意識の形成についてどのように考えていたのかを、その「イタリア性」(Italianità)⁵⁰⁾と「バリッラ」観について順次みていくことにしたい(以下では煩雑さを避けるためそれぞれの括弧は付さない)。

3——ヴァンバのイタリア性

イタリアの統一がなされ、1871年にはローマを首都とすることが決まった。しかし、「イタリアはつくられた。あとはイタリア人をつくらねばならない」とのマッシモ・ダゼーリョ(Massimo Taparelli d'Azeglio、1798–1889年)の指摘通り⁵¹⁾、国民の創生あるいは国民意識の形

成はその後長きに亘って課題となった。ファシズム政権で教育相となる哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレ (Giovanni Gentile, 1875–1944 年) は「国民は自己を主張し、自己実現をする人民の共通意思である」と指摘した⁵²⁾。1861 年以後、臣民・市民・国民が相互互換的に使用されたことから⁵³⁾、市民も国民もいまだイタリアでは明確に形成されていなかった現実が看取されよう。

本節では、ヴァンバのイタリア性についての考えを、『イタリア！イタリア！』を中心に探ることとしたい。

本書冒頭には、1848 年にブルボン家の圧政に対して立ち上がったシチリアの人民と子どもたちの営為を描いた「英雄の年の夜明け」(L'alba di un anno eroico)⁵⁴⁾、1849 年革命で共和国樹立を目指したものの失敗に終わった人民の努力を讃えた「1849 年 2 月 9 日」(Il 9 Febbraio 1849)⁵⁵⁾、1870 年にイタリア王国軍がローマ入城を果たし、ローマを首都とするに至った経緯と意味を強調した「ピア門——1870 年 9 月 20 日」(Porta Pia – XX settembre 1870)⁵⁶⁾、などの初期 GDD に掲載されたものが再録されている。

ヴァンバにとって重要であったのは、外国勢力への抵抗の強い意志、とりわけオーストリアに対する敵愾心と抵抗の歴史であり⁵⁷⁾、それはイタリア性の重要な側面を担っていた。同時にイタリア性は「ローマ」に象徴されるものでもあった。「ローマに我々はある、そこに我々は留まるだろう。」ヴォイットリオ・エマヌエーレ 2 世の言葉をそのままタイトルとした論考で、ヴァンバは、

イタリア人がイタリアに暮らす限り、そうであるし、またそうであり続けるだろう。ローマは我々の起源であるから。ローマは我々の歴史であるから。ローマは我々の生命であるから。ローマは我々の未来であるから。そして、ローマのないイタリアはもはやイタリアではないから。⁵⁸⁾

と結んでいる。ヴァンバは、「子どもたちも巨大な人間社会に積極的に関れるし、関らなければならない」と考えていた⁵⁹⁾。このようなヴァンバの特徴が、イタリア性をめぐる議論にもよく示されているといえよう。

第一次世界大戦後も、外国勢力への抵抗と「自由で独立したイタリア国民」⁶⁰⁾がヴァンバにとって重要なテーマであることに変わりはない。むしろ、「損なわれた勝利」によって、その傾向は一層強まったといえるだろう。マッツィーニやガリバルディなどの人物とその言葉が頻繁に引用紹介されている点も同様である。

フランスやオーストリアなど外国の侵攻に対する抵抗の歴史を紹介した上で、今日、「勝利するイタリアの機会」は、これまでになく高まっていると強調するヴァンバは⁶¹⁾、ガリバルディを紹介することで子どもたちを激励する。困難なオーストリアとの戦いの最中、「ここで勝利するか死ぬかだ！」とのガリバルディの言葉を引用し⁶²⁾、「我々の歴史の惨めさ」は現在でも示されているという。フィウーメやダルマチアなどを念頭に、第一次世界

大戦後にリソルジメント及びイッレデンティズモが「中断された」とヴァンバが捉えているからである⁶³⁾。

「損なわれた勝利」に関わってヴァンバは、未回復のイタリアの回復を強調する⁶⁴⁾。それは、リソルジメントの一環であった。「イタリアに加えられる不正義に一層激怒する」と述べるヴァンバは、「イタリアのリソルジメントという大いなる奇跡は、人間性の最も栄光ある宿命の中で」行われたことを強調する⁶⁵⁾。さらに、「勝利」したにも拘らず、権利を奪われた点を繰り返し強調し、「イタリア、イタリア！」という叫びは、「我々の叫びである。すなわち、フィウーメとダルマチアの我々すべての同胞の叫びである」とする⁶⁶⁾。同時に、イタリア内部の親オーストリア勢力あるいはオーストリアの動向を気にする勢力に対しては、「売国奴」と断じて厳しく苦言を呈している⁶⁷⁾。そして、皮肉を込めて、フィウーメの子どもたちが「イタリア万歳」という叫びをあげるのを禁ずることは、恥ずかしいことだがかかる「売国奴」たちにすれば「論理的」であろうと述べるとともに、ヴィットーリオ＝ヴェーネトの勝利という「夜明け」が来たとして、政府が行っている禁圧でも、「イタリア万歳！」という迸り出る叫びを押さえつけることはできないと強調する⁶⁸⁾。ヴァンバにとって、ダンヌンツィオのフィウーメ占領は、イタリア「共同体の人民に栄光の偉大さをもたらした」特筆すべき行為であった⁶⁹⁾。その点を強調しながら、子どもたちに「君たちの精神の純粋さ」と「勇気」⁷⁰⁾、祖国イタリアへの「忠誠」を持つ重要性を再説する⁷¹⁾。そして、実際にそれを体現した事例をさまざまに紹介する⁷²⁾。たとえば、対オーストリア戦争の勝利の記念祭をやりとした学生たちが弾圧されて死傷者が出た事件を紹介しながら、そのようなイタリア性を表明しようとするイタリア国内の動きを抑圧している体制に対して、ヴァンバは繰り返し批判している。その上で、「イタリア万歳！」と「イタリアの兄弟たちよ」というマメーリの賛歌をローマで叫ぶ権利がある、と子どもたちに呼びかけている⁷³⁾。

このように、ヴァンバのイタリア性強調とそれを背景としたイッレデンティズモは変わることがなかった。ファシズム陣営が、第一次世界大戦もリソルジメントの戦いとして捉え、「損なわれた」勝利を完全なものへと修復する存在として自らをリソルジメントの直接の後継者と主張した点を想起すると⁷⁴⁾、ヴァンバのリソルジメント理解そしてイタリア性は、一見それと重なり合う可能性を有していたようにも映る。

4——ヴァンバのバリッラ観

本節では、ヴァンバがバリッラをどのように捉えていたのかを検討する。

「このさきやかな子ども向け新聞において我々は常に政治について、真の政治について、よい政治について、扱ってきた。」このように述べるヴァンバは、イッレデンティズモを禁ずる動きに対して、「イタリア人にイタリア性すら禁ずるところにまで来ている」と断じた。「我々はイタリアにいる。我々すべてがイタリア人である！」とのイタリア性の意識は

未回復のイタリアを含む全土で高まっているとヴァンバは見ていた⁷⁵⁾。このようにヴァンバが記したのは、イタリア王国 50 周年記念祭の直前であり、同年イタリアはリビア戦争に突入していった。当時の議会や政府についてヴァンバは、「愛国主義的レトリックで夢中になって泥酔状態にいる」ところがあるとしている⁷⁶⁾。既述の通りイタリア・ナショナリスト協会の設立大会に参加しなかったことと合わせると、ヴァンバは、いわゆる愛国主義者やナショナリストらとは一線を画していたといえよう。

ヴァンバが強調するのは「市民教育」であり、「雑誌が政治の領域に子どもたちを呼び込んだのは」GDD が最初であると強調している。その政治とは「真の、美しく素晴らしい政治である。それは常に続くと私 [ヴァンバ] が信じる政治である。」そのためにも「市民教育」が重要であり、その「市民教育」は「この新聞 [GDD を指す] で提示されるもので」とあるとする。前述の「同盟」を組織したのも「市民教育」の一環であったといえよう。それを通して、具体的には、「イタリアになされたあらゆる侮辱に対して反抗するという、何よりもイタリア人一人一人の義務を教えた」というのがヴァンバの見解であった⁷⁷⁾。

イタリアが協商国側にたって参戦してほぼ半年が経過した 1915 年 11 月、ヴァンバは『『バリッラと呼ばれるイタリアの子どもたち』：国民的リソルジメントにおけるイタリアの子どもたち』を著した。同書は、数十点以上の図版や肖像画、人物写真などを収録しており、ヴァンバが本書のために資料収集を丹念に行ったことが窺われる。以下、簡潔に本書の内容を紹介しながら、ヴァンバのバリッラ観をみていくことにする。

序文でヴァンバは、「国民的リソルジメントにおける子どもたち」という。これがすなわちバリッラである。ジョスエ・カルドゥッチ (Giosuè Carducci, 1835—1907 年) の 1846—1847 年の詩を引用しながら、「金髪の戦闘的詩人 [カルドゥッチ] は、祖国の栄光をかくも詰め込んだその詩節で、イタリアの子どもたちはみなバリッラであると世界に叫びながら、再びジェノヴァの英雄的少年を思い出させていた」と述べる。そして、「忌まわしいオーストリアに対する憎悪」を強調しながら、「多くの英雄的な子どもたちがいる」こと、その子どもたちは「ハプスブルク家の野蛮な連中の下で」血を流したとする⁷⁸⁾。

本論では、オーストリアとブルボン家支配に対する反発と憎しみを明らかにしながら、ジェノヴァ・シチリア・ミラーノ・ナポリ・モデナ・フィレンツェなどイタリア各地の具体的な抵抗の様相を叙述していく。そこで描かれるのは子どもから学生までの若い世代の行動である。たとえば、1848 年 3 月のミラーノにおける運動では、子どもたちにも容赦しないオーストリアの残虐ぶりを描くとともに、砲弾で片手を吹き飛ばされた子どもが「イタリア万歳！素晴らしいイタリア人！」と叫んだことや⁷⁹⁾、ローマでは子どもたちが市民警備隊として街頭に立ったことを当時の版画を入れつつ紹介している⁸⁰⁾。各地の抵抗運動の最中に虐殺されたり処刑されたりした若者たちを多く紹介している点は注目される。また、本書でもガリバルディに関する記述は目を引く。およそ全体の四分の一以上の分量を当てて、ガリバルディの千人隊やガリバルディ自身について、また、現在のイタリアの子どもたちにガリバルディの資質を継承するよう強調している。「もしも君たちがガリバルデ

ィのようになりたいのなら、利己主義からくるすべての欠点を無くさなければならない。」こう述べるヴァンバは、さらに高い理想を持つこと、服従の重要性などをガリバルディに言及しながら強調する⁸¹⁾。

第一次世界大戦について、「イタリアがその完全な統一を達成するために闘っている」と見るヴァンバは、ミラーノでは孤児の子どもたちが手紙や小包の配達という公共サービスを勇敢に行っている事例を紹介しながら、「市民的機能において、闘う兵士たちに代わって、君たちは、君たちとして、祖国の兵士の義務を成し遂げたのである」と評している⁸²⁾。

一方最古のバリッラはダヴィデであるとも述べるヴァンバは、特にフィレンツェのミケランジェロ広場にダヴィデ像が置かれている点に触れ、同広場は「フィレンツェの自由のために戦った場所」であり、そこに置かれたダヴィデ像は、「祖国の自由を守るために、いつでも誰に対しても用意ができていようにしなさい！」と語りかけているとする。その上で、「現在の 1915 年のイタリアの子どもたちも……国民的リソルジメントが再び成し遂げられるべき地点に立っているのである」と述べ⁸³⁾、次のように続ける。「私、君たち、君たちの友だち、君たちの父親や母親、すべての人はイタリア精神を持ったイタリア人である。」これがヴァンバの言うバリッラであり、イタリア性と不可分の関係を有している。ウィーン会議後のイタリアの「分断」から一世紀後の今日「イタリアは、ついにその完全な統一を達成する」と述べる。その真意は、「自然と歴史によって明確なこの我々のイタリア」に関して、「ヨーロッパの地図からあの恥ずべき多色の汚点 [オースリアのこと] を全面的に抹消した」と歌い上げて本書を閉じている⁸⁴⁾。

「バリッラと呼ばれるイタリアの子どもたち」という一節は、マメーリの「賛歌」にも登場する⁸⁵⁾。ヴァンバにとって「バリッラ」とは、イタリア性を持った国民的リソルジメントの子どもたちであり、祖国の自由と独立、精神の純粹さと忠誠心を兼ね備えた子どもたちであった。さらにいえば、単に子どもたちだけではなく、そのような資質＝イタリア性を有したイタリア人は、年齢を問わず「バリッラ」であった。そこに改めて、「バリッラ」とイタリア性の不可分さが明示されている。

—— おわりに

1943 年、ムッソリーニは罷免された。その後、イタリア各地でドイツ軍による虐殺が起きると⁸⁶⁾、パルチザンの蜂起が相次いだ。バリッラ少年団に加わった少年たちの中には、パルチザンになった者も少なくなかった⁸⁷⁾。

ヴァンバにとって、イタリアの自由と独立、具体的には外国勢力の侵攻に対する抵抗精神と具体的行動、その背景にある祖国イタリアへの忠誠、これらを包括するのがイタリア性であり、そのイタリア性を体現しているのがバリッラであった。ガリバルディの資質に触れながら「服従」も強調するヴァンバは、限りなくバリッラ少年団の標語に近い考えであったと捉えられるかもしれない。しかし、リソルジメントの伝統とイッレデンティズモ

を強調しながらも、ヴァンバはイタリア・ナショナリスト協会と一線を画したことは想起すべきである。同時にヴァンバは「市民教育」の重要性を理解し、子どもたちを「政治の領域」に呼び込んだ。その「政治」とは、「真の、美しく素晴らしい政治」であり、恒常的に続くとヴァンバが信じる政治であった。果たして、ファシズム政権下の政治がそれに値したのだろうか。

善意と美德及びガリバルディ的資質の強調、そして何よりも子どもを一人の人間として扱うヴァンバの姿勢、などを考えれば、一見重なり合うように見えながら、ヴァンバはファシズム政権とは方向性を異にしていた可能性が高いといえるのではないだろうか。少なくとも、ステレオタイプ化して型にはめるファシズム政権のバリッラ少年団とヴァンバのバリッラ像とは差異があると思われる。

それでもなお、パルチザンに加わったバリッラ少年団メンバーは存在した。そのこと自体が、ヴァンバのイタリア性とバリッラ像とを象徴しているとみるのはあながち牽強附会ではないだろう。

《注》

- 1) 北原敦編『世界各国史 15 イタリア史』山川出版社、2008年、では「バリッラ事業団」としている。訳語として正確ではあるが、実態を考えると却って誤解を生む可能性もあり、本稿では「バリッラ少年団」と表記する。
- 2) Rinaldo Capomolla, Marco Mulazzani, Rosalia Vittorini, *Case del Balilla. Architettura e fascismo*, 2008, pp.197-203. なお、本書には多数の「バリッラの家」について、豊富な写真と設計図面とが掲載されている。
- 3) James W. Miller, "Youth in the Dictatorships", *The American Political Science Review*, Vol.32, No.5, Oct. 1938, pp.965-970, 北原編、前掲書、314頁及び496頁、を参照。
- 4) Giuseppe Ricciardi, *Opere Scelte, Vol. 7: Balilla; Torquemada; Maria Maddalena; I Due Candidati* (Classic Reprint), Napoli: Dalla Stamperia Del Viaggio, 1870, pp.1-94.
- 5) たとえば、Federico Donaver, *Uomini E Libri: La Leggenda Di Balilla; La Gioventu Di Mazzini; Mazzini E Garibaldi; Il Conte Di Cavour; Martino Piaggio; M. A. Canini; Foscoliana; Epistolario Guerrazziano; Il Conclave Di Leone XIII; Il Giornale D'Una Borghese* (Classic Reprint), Genova: Tipografia Del R. Istituto Sordo-Muti, 1888, pp.11-57.
- 6) Alessio Ponzio, *Shaping the New Man: Youth Training Regimes in Fascist Italy and Nazi Germany*, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 2015, pp.34-35. 本書は、イタリアのバリッラ少年団とドイツのヒトラー・ユーゲントを比較検討したもので、バリッラ少年団についても形成から終焉までをまとめている。
- 7) "Recruits for Balilla", *Time*, May 9, 1938, Vol.32, Issue 10, p.1.
- 8) 文部省社会教育局『児童生徒校外生活指導叢書 第7輯 伊太利少年少女團教範』1936-1939年、3頁、外務省調査部第二課編『ファシスト伊太利の政治組織とその運用並に反対派勢力』防共協定国国情調査、第13号、1939年、124-127頁。
- 9) たとえば、大阪毎日新聞社編『集団行動：厚生運動』大阪毎日新聞社、1938年、76-83頁、渡辺誠『ファシズム教育』(戦争文化叢書 第14輯) ヨーロッパ問題研究所、1939年、52-81頁、柏熊達生『伊太利案内』改造社、1940年、37-63頁、金澤正裕「講和資料 伊太利を救った小英雄バリッ

- ら」、帝国少年団協会編『帝国少年団協会叢書』第17号、帝国少年団協会、1940年、58-62頁、など。
- 10) たとえば、「愛国の意気に燃ゆ ドイツとイタリーの少年少女 二荒伯のお土産話」1937年11月14日付『朝日新聞』朝刊（東京）、6面、「ドイツとイタリー両国の少年団 スポーツで鍛へる身体 愛国の心に燃ゆ」1938年5月29日付『朝日新聞』朝刊（東京）、6面、「躍進イタリア展望 青少年訓練は結実！ 敬虔の宰相ムソリーニ」（駐伊大使館付武官として2年8か月駐在した陸軍大佐有末精三談）1939年8月8日付『読売新聞』朝刊、2面、など。
 - 11) 管見の限り、バリッラ少年団を正面から扱う日本語文献は乏しい。
 - 12) ヴェンバならびにGDDについては、拙稿「20世紀初頭のイタリアにおける国民意識創出の試み——子ども向け日曜新聞 *Il giornalino della domenica* と Luigi Bertelli についての一考察——」『和光大学現代人間学部紀要』第10号、2017年3月、7-23頁、を参照。
 - 13) 岡俊孝「フィウメ [マ] をめぐるイタリアの対ユーゴ政策——20年代初期イタリア外交の性格——」『国際法外交雑誌』第74巻第1号、1975年、94頁。
 - 14) たとえば以下の各拙稿を参照、「ドイツの教科書にみる近代日本像の変遷」『敬愛大学国際研究』第6号、2000年11月、91-126頁、「ドイツの教科書に見る戦後日本像の変遷」『敬愛大学国際研究』第9号、2002年3月、1-39頁、「イタリアの地理教科書にみる日本イメージの変遷」『和光大学現代人間学部紀要』第3号、2010年3月、99-115頁、「イタリアの戦後歴史教科書に見る日本イメージの側面」『和光大学現代人間学部紀要』第4号、2011年3月、91-113頁。
 - 15) 前掲拙稿「20世紀初頭のイタリアにおける国民意識創出の試み——子ども向け日曜新聞 *Il giornalino della domenica* と Luigi Bertelli についての一考察——」。
 - 16) Vamba (Luigi Bertelli), *"I bimbi d'Italia si chiaman Balilla" I ragazzi italiani nel Risorgimento nazionale*, R.bemporado & Figlio, Firenze, 1915.以下、Vamba, Balilla と略記する。
 - 17) Vamba (Luigi Bertelli), *Italia! Italia! Libro per i Ragazzi*, Firenze: R. Bemporad & Figlio, 1927.以下、Vamba, *Italia!* と略記する。
 - 18) クリストファー・ダガン著河野肇訳『ケンブリッジ版世界各国史 イタリアの歴史』創土社、2005年、238-285頁。
 - 19) 本節については、特に注記しない限り、森岡鉄郎・重岡保郎『世界現代史22 イタリア現代史』山川出版社、1977年、北原編、前掲書、ダガン、前掲書、シモーナ・コラリーツィ『イタリア20世紀史』名古屋大学出版会、2010年、などに拠っている。
 - 20) ロザリオ・ヴィッラリ著村上・阪上訳『世界の教科書シリーズ19 イタリアの歴史 【現代史】——イタリア高校歴史教科書』明石書店、2008年、120頁。
 - 21) トラスフォルマーレ (trasformare) とは、「変移する」「変容する」という意味だが、1876年に政権に就いたデプレーティス首相は、共和制を追求する歴史的左派もそれに対峙する歴史的右派もともに「変移する」必要を訴えた。そして両派の提携による政府多数派の形成を呼びかけたのである。結果的に奏功し、多数派が形成されたが、無節操な便宜主義的多数派工作であり、以後も各議員の個別利害取引によって政府多数派を形成する慣行が醸成された（北原編、前掲書、428-429頁、森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、144-147頁）。
 - 22) 歴史学者で後にファシズムを肯定するに至った人物の指摘（ダガン、前掲書、250頁）。
 - 23) ヴィッラリ、前掲書、120頁。
 - 24) このようにジョリッティのトラスフォルミズモは、前世紀のトラスフォルミズモに比して、働きかけの対象を社会党や労働運動の指導層にまで拡大させたものであった。それだけに、一層無節操な多数派工作の色彩を強めた（森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、144-147頁）。
 - 25) 森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、194頁。「未来派宣言」11項目については、藤岡寛己『原初的ファシズ

ムの誕生 イタリア戦闘ファッショの結成』御茶の水書房、2007年、70-72頁に訳出されている。「未来派」は、ミラーノを拠点とした前衛芸術運動とも言えるが、その範囲は極めて広汎であり、単なる文学・美術・服飾などに止まらず、政治的・社会的側面も重要である。特色としては「過去主義」との訣別が要点であるが、「過去主義」には「懐古趣味」の他に、「過去への惑溺」・「伝統的保守主義」・「保守反動」などが含意される。それと対置して「未来主義」を強調した点が特徴である（藤岡、前掲書、76頁）。

26) ダガン、前掲書、248頁。

27) *Il Nazionalismo Italiano, Atti del Congresso di Firenze, e relazioni di E.Corradini, M.Maraviglia, S.Sighele, G.de Frenzi, F.Carli, L.Villari, M.P.Negrotto, a cura di G.Castellini*, Firenze: La Rinascita del Libro, Casa Editrice Italiana di A.Quattrini, 1911（以下、*Il Nazionalismo Italiano*, と略記する）なお、本報告書を訳出したものとして、藤岡寛己「イタリアナショナリズム協会の結成（1910年12月）その1：第1日目の報告と議論」『福岡国際大学紀要』第34号、2015年7月、1-19頁、がある。同2日目、同3日目についても『福岡国際大学紀要』第37号、2017年3月、1-18頁、同第38号、2017年7月、13-27頁に訳出されている。

28) *Il Nazionalismo Italiano*, p.34.

29) 前掲 *Il Nazionalismo Italiano* には、出席者ならびに発言者が詳細に記録されているが、ヴァンパの名は見当たらない。

30) 1913年10月11日、マリネッティは「未来派」の「第三政治綱領宣言」を発表した。そこには、「民主派」・「共和派」・「社会主義派」を「左翼的臆病」として、「教権派」・「穏健派」・「自由主義派」を「右翼的臆病」として、それぞれをまとめて批判している（藤岡、前掲書、80頁）。「臆病」という点は除いて、この区分自体は概ね妥当といえる。この他、サンディカリストも存在するが、一般的には前者に含めてよいだろう。なお、統一直接後の状況で言えば、議員は「右派」と「左派」に大別された。この場合の「右派」の多くは土地所有貴族で、穏健自由主義的な立場をとる一方、「左派」はガリバルディやマッツィーニと活動をともにしたりリソルジメント期の民主派の流れを汲んでいた（北原編、前掲書、409頁）。

31) ダガン、前掲書、264-265頁。

32) サンディカリズムは19世紀末のフランスで台頭し、日本では労働組合主義などと訳されることが多い。しかし、サンディカリズムには「改革派」と「革命派」があるとされるが、労働組合主義が先行していたイギリスでは専ら後者を指すようになった。むしろ「改革派」サンディカリズムは、イギリスの労働組合主義の政策に似た政策をとっている。このように指摘するのは、イギリス労働党議長を務め、後に二度にわたって労働党内閣を組閣することになるラムゼイ・マクドナルドである（James Ramsay MacDonald, *Syndicalism, A Critical Examination*, London: Constable & Co.Ltd., 1912, p. vi）。サンディカリズムの特徴は、直接行動＝ゼネストを重視する点である。イタリアでは「革命的サンディカリスト」が優勢で（北原編、前掲書、465-471頁）、フィウーメ占領にも「革命的サンディカリスト」の参加が見られた（同前、478頁）。マクドナルドは、各国のサンディカリズムについて言及し、「イタリアでは、労働者階級の心情の無政府主義的不安定さの一部であり、イタリアに起源を持つ悪しき政治の生産物の一つである」と断じている（*op.cit.*, p.35）。実際、その後のファシスト労働組合運営には、サンディカリスト出身の活動家の働きがあり、国民ファシスト党書記長にはサンディカリスト出身のビアンキが就任している（北原編、前掲書、481-484頁）。また、ムッソリーニは、革命的サンディカリズムからファシズムへの転向を見事に体現したと評されている（森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、184頁）。

33) ダガン、前掲書、264頁、コラリーツィ、前掲書、46-48頁。なお、「リソルジメント」（risorgimento）は再興という意味で、一般的にはイタリアの統一国家形成過程を指すが、その始期については、

1848年革命以降とするものが多く、1860年の統一国家形成までの時期をリソルジメントの時代といふことが多い（北原編、前掲書、356頁）。ただし、フランス革命の影響とナポレオン戦争とに着目し、フランス革命以降をリソルジメントと捉える場合も少なくない（森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、60-126頁）。さらには、より広汎に「リソルジメントとは、ヨーロッパの、ひいては世界の枠組みのなかに、イタリアが——それもイタリア全体が——加わっていく、一七世紀から始まる過程にほかならない」とする見解もある（ルッジェーロ・ロマーノ著関口英子訳『イタリアという「国」——歴史の中の社会と文化——』岩波書店、2011年、161頁）。この指摘に見られるように、各種の見解に共通するのは、「リソルジメント」を単なる国家統一運動のような特定の目標に向けての運動と同一視するのは適切ではなく、イタリアをよりよい状態にしようとする政治、社会、経済、文化の動き全体を現しているとする点であろう（北原編、前掲書、356-357頁）。

- 34) ダガン、前掲書、264-265頁、ヴィッラリ、前掲書、144-148頁。「光り輝く五月の日々」とはダンヌンツィオの表現である。
- 35) ダガン、前掲書、266頁。
- 36) Lea Nissim Rossi, *Vamba* (Luigi Bertelli), Firenze: Le Monnier, 1966, p.16-17.
- 37) 「ダンヌンツィオの『船』」(La Nave' di D'Annunzio)、GDD, Anno III, N.23 Firenze 7 Giugno 1908, pp.1-4 (以下、GDD, III-23, 7 Giugno 1908 と略記する)。
- 38) コラリーツィ、前掲書、93頁。国民ファシスト党員の約13%は学生が占めていた。
- 39) ヴィッラリ、前掲書、202頁。
- 40) いささか意識的にすぎるかもしれないが、その実態を考えるとこのような表現を採る方が適切と思われる。
- 41) GDD, III-26, 28 Giugno 1908, p.1.
- 42) *op.cit.*
- 43) Rossi, *op.cit.*, p.28.
- 44) GDD, III-26, 28 Giugno 1908, p.1.
- 45) 「イッレデンティズモ」は「イッレデンタ併合主義」なども訳されるが、「イッレデンティズモ」と表記する場合が多い。1866年の普墺戦争講和条約で、イタリアはヴェネト州を「回復」したが、トレンティーノ、トリエステ、ゴリツィア＝グラディスカ、イストリアなどは依然としてオーストリア領のままであった。そこで、「未回復地」(terra irredenta) の回復を目指す政治運動が起きた。具体的には1877年に共和主義者インブリアーニは「未回復（イッレデンタ）イタリアのための協会」を結成し、トレンティーノとトリエステのイタリアへの帰属を提唱した。これに対して、1888年に首相となったクリスピは、反仏親独政策を採ったことから、イッレデンティズモ運動を抑圧し、この運動を進める共和派諸団体の解散を命令した。このような対応は、特に左派から強い反発を生んだ（北原編、前掲書、440-441頁、森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、132、159頁）。
- 46) 1908年10月、オーストリアがボスニア・ヘルツェゴビナの併合を宣言すると（木戸菊『バルカン現代史』山川出版社、1977年、155頁）、イタリアではイッレデンティズモが再び高揚した（森岡鉄郎・重岡保郎、前掲書、166頁）。ヴァンバが「同盟」を創設したのはそれよりも先であるが、このようなバルカン情勢の展開、とりわけオーストリアの動向を以前から注視していた可能性はあるだろう。
- 47) ヴァンバ著池上俊一訳『ジャン・プラスカの日記』平凡社、2008年。
- 48) もともと、手をつないで輪になって歌いながらぐるぐる回る子どもの遊戯を指す。
- 49) 1910年までは「通信欄」(Corrispondenza) の「赤いページ」(Pagine Rosa) に「政治面」(Parte Politica) を設けて不定期だが掲載されている。また1919年以降は同じく「赤いページ」に「同盟」の欄を設けて不定期ながら掲載されていて、1920年に入るとその掲載頻度は急増している。なお「同盟」並

びに A.I.D.A.I.についてはそれ自体詳細な検討分析に値するが、それは別の機会に譲ることとした。

- 50) Italianità という用語には、イタリア人気質、イタリア人の国民性などの訳語が当てられるが、本稿では「イタリアであること、イタリア人であること」を包含するものとして、敢えて「イタリア性」と記すことにする。
- 51) ポール・ギショネ著幸田礼雅訳『イタリアの統一』白水社、2013 年、164 頁。
- 52) 中川政樹「ジェンティーレにおける国家と教育」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』第 42 巻、2016 年 12 月、56-57 頁。
- 53) Sabina Donati, *A Political History of National Citizenship and Identity in Italy, 1861-1950*, Stanford University Press, Stanford, California, 2013, p.11.
- 54) GDD, II-2, 13 Gennaio 1907, pp.1-5.
- 55) GDD, II-6, 10 Febbraio 1907, pp.1-3. 原題は「偉大なる記念日 1849 年 2 月 9 日」(I Grandi Anniversari, II 9 Febbraio 1849)。
- 56) GDD, II-38, 22 Settembre 1907, p.1.
- 57) 「山村の住民」(Curtatone e Montanara)、Vamba, *Italia!*, pp.27-36 (日付はなく、現時点で GDD の掲載については確認できない)。「イタリアの旗の兄弟仲間」(I compagni dei fratelli Bandiera)、GDD, V-41, 9 Ottobre 1910.
- 58) 「ローマに我々はいる、そこに我々は留まるだろう。」(A Roma ci siamo e ci resteremo) Vamba, *Italia!*, p. 95 (日付はなく、現時点で GDD の掲載については確認できない)。
- 59) Rossi, *op.cit.*, p.28.
- 60) 「1959 年 6 月 24 日」(24 Giugno 1859)、GDD, VIII-25, 20 Giugno 1920, pp.1-2.
- 61) 「2 月 3 日から 3 月 21 日」(3 Febbraio. - 21 Marzo)、Vamba, *Italia!*, pp. 10-12 (1919 年 3 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 62) 「悲しい記念祭」(Triste ricorrenza)、Vamba, *Italia!*, p. 88 (日付は記載されておらず、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 63) Vamba, *Italia!*, p.89.
- 64) 「イタリアとその権利」(L'Italia e il suo diritto)、Vamba, *Italia!*, pp. 141-142 (1919 年 5 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 65) 「イタリア、かわいそうな奴」(L'Italia, povera crista)、Vamba, *Italia!*, pp. 229-232 (1919 年 7 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 66) 「イタリア！イタリア！」(Italia ! Italia !)、Vamba, *Italia!*, pp.200-203 (1920 年 2 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 67) 「ウィーンの子どもたちの叫び声」(Il grido dei bimbi di Vienna)、Vamba, *Italia!*, pp. 234-238 (1920 年 2 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 68) 「フィウーメの子どもたちの叫び声」(Il grido dei bimbi di Fiume)、Vamba, *Italia!*, pp.238-240 (1920 年 3 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。
- 69) 「古い『貴族』の没落と新しい高貴さの日の出」(Il tramonto della vecchia "nobilea" e l'arba della nuova nobilità)、GDD, VIII-37, 12 Settembre 1920, pp.1-3.
- 70) 「将来の威信」(L'autorità dell'avvenire)、GDD, VIII-20, 16 Maggio 1920, pp.1-4.
- 71) 前掲「古い『貴族』の没落と新しい高貴さの日の出」、GDD, VIII-37, 12 Settembre 1920, 及び「復活祭のお祝い」(L'augurio di Pasqua)、Vamba, *Italia!*, pp.224-226 (1920 年復活祭、GDD, VIII-14, 4 Aprile 1920, p.1).
- 72) たとえば「アデレイド・カイローニ」(Adelaide Cairoli)、Vamba, *Italia!*, pp.90-93 (日付なし、現時点で

GDD の掲載については未確認) でヴァンバは、息子たちをガリバルディの下へ送り出した母親の気高い精神を称賛している。

- 73) 「ローマのオーストリア」(L'Austria a Roma)、Vamba, *Italia!*, pp.213-217 (1920 年 5 月、現時点で GDD の掲載については未確認)。なお、「マメーリの賛歌」は、現在のイタリア国歌である。ゴッフレード・マメーリ (Goffredo Mameli, 1827-1849 年) はジェノヴァ生まれの愛国詩人で、ミケーレ・ノヴァーロ (Michele Novaro, 1822-1885 年) が作曲した歌は、1946 年にイタリア国歌として採用された。なおマメーリについては、Massimo Scioscioli, *Goffredo Mameli, Una vita per l'Italia*, Roma: Editori Riuniti University Press, 2011, を参照。
- 74) ロマーノ、前掲書、157-158 頁。
- 75) 「バリッラと呼ばれるイタリアの息子たち」(I figli d'Italia si chiaman Balilla)、Vamba, *Italia!*, pp.105-118 (GDD, VI-10, 5 Marzo 1911, pp.5-8)。
- 76) Vamba, *op.cit.*
- 77) Vamba, *op.cit.*
- 78) Vamba, *Balilla*, pp.VII-XV.
- 79) Vamba, *Balilla*, p.40.
- 80) Vamba, *Balilla*, pp.124-126.
- 81) 「今日の子どもたちへ」(Ai ragazzi d'oggi)、Vamba, *Balilla*, pp.207-213. なお、内容的には「君たちはガリバルディのような人になりたいかい?」(Volete voi essere garibaldini?, GDD II-27, 7 Luglio 1907, pp.1-5.) と重なるところが多い。
- 82) 「戦争のためにできることすべてを全員にさせる現在の義務」(Il dovere presente di far tutti tutto quell che si può per la guerra.)、Vamba, *Balilla*, pp.213-215.
- 83) 「最古のバリッラ」(Il Balilla più antico.)、Vamba, *Balilla*, pp.215-217.
- 84) 「1815-1915」(1815-1915.)、Vamba, *Balilla*, pp.217-218.
- 85) Anonymous, *Goffredo Mameli*, BiblioLife, p.55 (本書は著者不詳、出版年も 1923 年以前ということしかわからない)。なお、Scioscioli, *op.cit.*, pp.294-295, には原版の楽譜と歌詞が掲載されている。
- 86) 特に知られているのが、1944 年 9 月のボローニャ近郊マルツァボット (Marzabotto) での住民虐殺である。この住民虐殺については、とりあえず Mary Toffoletto Romagnoli, Al Card. G.B. Nasalli Rocca Arcivescovo di Bologna, *Sull'Eccidio di Marzabotto, Dalla Testimonianza dell'orsolina Antonietta Benni*, Comitato Regionale per le Onoranze ai Caduti di Marzabotto, Edizioni Digi Graf, 2011. を参照。なお、本書については、補足情報を追加したドイツ語版もドイツで刊行されている (*Berichterstattung von Mary Toffoletti Romagnoli über die Massaker von Marzabotto, Basiert auf der Zeugenaussage von Antonietta Benni, Erzieherin, Ursulinerin an den Kardinal von Bologna, S.E.Nasalli Rocca*, Essen: Nima Verlag, N.D.)。また、抵抗運動に関しては、Bruno Veronesi, *Una Vita Partigiana*, Bologna: Edizioni Aspasia, 2011. を参照。日本語文献としては、岡田全弘『イタリア・パルティザン群像 ナチスと戦った抵抗者たち』現代書館、2005 年、74-85 頁、を参照。
- 87) Emanuele Cassarà, *Un Balilla Partigiano*, Torino: CDA Vivalda Editori, 2004. 本書は、パルチザンになったバリッラ少年団員の回想をまとめたものである。